

* 埼玉大学

再生

櫛田 椋子

ばあちゃんをお風呂に入れた。私の担当だった。熱いのがいいといってきかない骨と皮のばあちゃんと共に煮られた。ガラスープになった私たち。

ばあちゃんに薬を飲ませた。私の担当だった。嫌だと泣いてかぶりをふるところに匙を突きつけた。ごめんね。ごめんね。ごめんね。

父がばあちゃんが汚した下着を洗った。これは吊るし洗いだと。君が赤ん坊のころにもやったと。赤ん坊の世話は老人の世話。老人の世話は赤ん坊の世話。

介護用ミトンに寄せ書きをした。どんなメッセージをどんな思いでどんな顔をして書いたのかはもう忘れた。自分の便を掻き出さないように嵌められる手錠のようなミトンに何を書くべきかというのか。

ばあちゃんの背中をながすと垢が出る。ぼろぼろでる。からだが生まれ変わる証拠。ばあちゃんは生きようとしている。

ばあちゃんは薬をすてる。飲んだと嘘つく。ぼろがぼろぼろでる嘘をつく。ばあちゃんは死のうとしている。

認知症は赤ん坊にもどる病気だ。何もわからなくなる。何もかも忘れる。産んだ娘も可愛い孫も愛した伴侶も忘れてまっさらになる。赤ん坊になる。泣いて排泄して世話される。何も知らないわからない新しい人生が始まる。ばあちゃんは新しく生きようとしている。ばあちゃん生きよう。生きよう。生きよう。

学校から帰ると家に花輪が立っていた。ばあちゃんが死んだと私に知らせたのは父の電話でも母のメールでもなかった。

三月十五日

安倍千晴

何日ぶりかの湯船に長い間浸かっていた母が

濡れた髪のままニユースを見たとき

黒ひげ危機一髪に負けたような声を一言あげた

前の日の晩まで日が落ちると

こんなときはワクワクするものと

お気に入りの美しいろうそくのコレクションに火をつけていた母は

しばらく前におじいちゃんが入院したとき以来の顔で

今日は外に出るはいけないと言った

それでも母は古いコートをクローゼットから出してきて

力強く傘をさしたのだった

まだ食べものを探しに出ないといけない頃だった

子どもたちはひっそり元気にしていた

ママがダメだってお外で遊べないみうちちゃんのこと

急に熊本産になった給食の牛乳も

隣の県から引っ越してきて学校見学に来た子のこと

ふーん……って聞くのがいいんだと知っていた

安全も危険も賛成も反対も

ふーん……って聞くのがえらかった

難しいからいろんな意見があるから誰が悪いか誰が大変か

先生でも解答書を持っていないことを子どもながら見抜いていた

私が母親だったならあの日傘をさす勇氣はあったか

みうちちゃんはどんな気持ちで外を見つめていたか

賛成と反対に揺れる投票日にどんな選択がなされていたか
毎日耳にしたあの測定値の単位はいつから聞かなくなったか
思い出し考えるとき
ふーん……と済ませることはできない
境なくつながっている海と空へ
失われている命と生活へ

鷹

工藤修也

外では草と土の匂いの混じった風が吹き
座っていてもものびのびする雲が見て取れる

選ばれるよりも選んでいて

高いものであればその分傷つける

集られても気にも留めずに邪魔であれば追い払える

高く飛んで大きな羽根を落とすことはしない

低く飛び回ってひけらかすこともない

古くても新しくても満遍なく上書きする

硬くても柔らかくても関係なく爪痕を残す

もし私が鷹に生まれ変わったとしたらこのような鷹になれるのか

きつと体も小さく気弱な私は鷹になってもそれは同じだ

息苦しいのにだだっ広い世界から逃げて小さな森で

弱者の前では爪を光らせ強者の前ではそれを鈍くする

また違う生物に生まれ変われば満足できると想像する

あいつは鷹に生まれ変わっても同じだ

鋭く大きな爪を隠して飛び回ることができて

人間やその他の生き物は憧れを抱き

そのようなあいつこそ爪痕を残す

ずっと遠くから向けられているような窓からの光で

身につけている金属の鈍さが露わになる

甲高い声に呼応して私は聞き耳を立てた

彼は鷹になって大きな翼で飛びたいと言った

彼女は猫になってのんびり海を見ていたいと言った

笑う男

若狭陽太

男は人を笑わせる才があったので

いつも下らない冗談を言つて みんなそれを聞いて腹を抱えて笑つた

彼は人を笑わせているとき 自分が世界でいちばん幸福に思えた

笑つた以上は 誰も彼に踏み込むことはできない

男は高い塀の上 深い堀のほとり 厚い装甲の向こうで 防衛戦をすること

にした

男は全ての人を笑わせたかつた

男は気付いていた 笑わせたいなら 相手と同じ景色を見なければ

男は学んだ 働いた 飲んだ 転んだ 見た 聞いた 味わつた

みんなは笑つた 日常を忘れた 頬は弛緩した 硬直した 腰は砕けた

彼の目の前で笑う人々の 脳の奥が弾ける様子は彼を虜にした

彼は絶えず分かち合い 線を引き 同じだけ腹を抱えて

誰の訪問も受けない不落の城の上

誰も触れない深海の骨の下で

彼は笑っていない時間の過ごし方を忘れていた

彼はふと 面白さについて考えを巡らせた

相手が知っていることを 相手が結びつけられなかった事物から結びつけ

き ひとつは笑うのだと考えていた

だが もしも 自らを曝け出すことが一番面白いのだとしたら

人が戸棚に閉まって開示しないことを 世界と結びつけられたら きつと面

白いに違いない

そう思つて 裸で芸をすることにした

人は日常を掻き乱される緊張感と 知っているものが結びつく安堵の虜にな

つた

彼は城を開場し 堀の水を抜き 装甲を外して裸になった

もっと自分の中を見せたい

もっと事物を繋げたい

自分の中に近づけば近づくほど面白いと思った

包丁を手にして 腹を捌き溢れる腸を見せた

まろび出した中身をひとしきり抑え 自らの手を見た

真っ赤に染まったそれを見て 「なんじゃこりゃあ」と言った

気づくのが遅いよ、と誰かが言った

紙

須藤風汰

紙は

うすっぺらで

しおらしく

でもときに

鋭い

そいつは

刃物でできたペンのように

僕の指に線を引いた

その鋭さが

僕の手をふるわせ

僕の心をふるわせる

ふるえる手で

そいつを握ってみた

くしゃり

……

紙はまた

ただの紙に戻った

カタマリ

野村百花

「あれ」は私の妹だったらしい
「あれ」は私の弟だったらしい

母の腹から流れていったあのカタマリは
私の妹だったらしい
私の弟だったらしい

あれは私の妹
いいやただのカタマリ
あれは私の弟
いいやただのカタマリ
あれはさくらちゃん
いいやただのカタマリ
あれはしょうたくん
あれは母の身体の一部
そしたら私もただのカタマリ？

ついこの間まで動いていたカタマリは
すぐに取り出されて
捨てられた
今までありがとうさようなら。

母の目から流れる体液とあのカタマリは何が違うのか

血も涙も母の身体の一部で
あれと中身はおんなじなのに
じゃあ私もおんなじカタマリ
今までありがとうさようなら。

いつか私も胎でカタマリを育てるのだ
今だってカタマリの素を捨ててる
材料が足りなかったってだけで
今までありがとうさようなら。
胎でカタマリを育てる感覚に
わたしは耐えられるだろうか

あれは私の娘
いいやただのカタマリ
あれは私の息子
いいやただのカタマリ
あれは○ちゃん
いいやただのカタマリ
あれは×くん
いいやただのカタマリ
あれは私の身体の一部
カタマリがカタマリを生む？

息をして出てきたカタマリは
こども
になるのに
息がでしなかつたものは
カタマリ
になる

息ができなかったってだけで
今までありがとうさようなら。

捨てられたカタマリは

どこにいくのか

灼熱の炎で灰になったかも

カラスに啄まれたかも

それなら

わたしも灰になったかも

わたしもカラスに啄まれたかも

痛い

いたい

カタマリは痛がらない

いたい

痛い

イタイ

今までありがとうさようなら。

パッチワーク少女

板垣佳友

赤いワンピースのあの子の通知表

秀ばかりで可がないの

だから愛されるのね

その子の頭を切り落として自分に縫った

曖昧な態度を取らないあの子は

ひの打ち所がない

だから愛されるのね

その子の皮膚を剥いで自分に縫った

あの子の心はどんな人でも

受け入れる

だから愛されるのね

その子の心臓をえぐって自分に縫った

わたしはパッチワーク少女

きつとこれで愛される

ゴミ

青木玲奈

切り捨てたつめは 私か
抜け落ちたかみは 私か
削ぎ落したあかは 私か
くっついていれば 名のあるものが
切り離されて ゴミになる
動かなくなり ゴミになる
固まって 血が通わなくなったゴミ
じゃあ
死体は私か？

自殺代行

西村嘉乃

あの日の朝、七時〇一分発大宮行きの電車は、私を迎えに来なかった。

エレベーター前

異様に人が溢れた小さなホーム

ブルーシートに覆われた身体

顔だけ見えた

即座に死ななかつた顔

死ねなかつた顔

死に損なつた顔

その姿を見たときに血液が全身を巡つた

ああ

私がなりたい姿

私は早くこれになりたいのに

私の家の最寄り駅は、飛び込み自殺がなかなか多い。

彼は死んだのだろうか

彼は無事死ねたのだろうか

名前も生まれも知らない彼に

私は今日も思いを馳せる

ありがとう

私の代わりに死んでくれてありがとう

死にきれない私の代わりに

死に損ないの私の代わりに

ありがとう

本当にありがとう

かつて一世を風靡したバンドのギタリストが死んだとき

一部のファンは追って自殺を図ったらしい

そんなに愛していたのだろう

そんなに愛していたのだろう

死に損ないの私を連れて行ってくれる誰かに

早く出会いたい

早く

早く

早く迎えに来て

お願い

早く早く早く早く早く！

もう、私は電車を待つとき、エレベーター前には立てない。

あれほど憧れた姿を見たのに、私はまだ、怖いと知っている。

この世界に別れを告げるには、私はまだ弱すぎる。

いつか私が死ぬ時は

勇気を出して飛ぶときは

誰かの代行になりたい

私の内臓を

骨を

血を

ぐちゃぐちゃのドロドロを

目に焼き付けて

臭いを鼻に覚え込ませて

無様な私に胸を高鳴らせて

私が胸を高鳴らせてから

半月後に死んだのは

かつてこの国の総理大臣だった男だった

誰かが立っている

市川 滂里

あれは何時間たった頃だろうか。

疲れていたからすぐに寝落ちしたはずなのに。

ふと眠りから覚めた。

人の気配を感じて。

誰かが立っている。

私のすぐそばで。

泥棒だったらいけないと思って、とりあえず寝たふりをして、携帯をにぎろうとした。

あれ、動かない。

手も足も首も。睨さえも。

初めて感じる重力。

急に湧いて出る冷や汗。

急に早くなる心臓。

体中が焦っていた。

うごけうごけうごけ

ずっと唱えた呪文。

どく どく どく

何度唱えても動くのは心臓だけ。

なんでなんでなんで

覚えのない拷問にかけられた。

どくん どくん どくん

それでも答えるのはさらに早くなる心臓だけ。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい

追い詰められて途方もなく謝るのは昔からの癖。

ばくん ばくん ばくん

聞いたこともない音をたてる心臓だけ。

それだけがずっとこの静かな部屋で響きわたる。

初めての金縛りは、

初めて私に死を覚悟させた。

孤独

中村明王

そこには、花火を観にきていた。
きっかけは覚えていない。

ただ、友人二人からはぐれた私は、
一人、喧騒の中で佇んでいた。

人の波に攫われながら、
どうにか連絡を取ろうと試みる。

メッセージ、

エラー。

着信、

不通。

不安に苛まれる私を他所に、
周囲の歓声がいつそう大きくなり、
私はなにかに包まれる。

瞬間、

炸裂音。

一瞬の爆発の後に、世界は音を失った。

再度、

炸裂音。

大地は激しく鳴らされる。

大地の振動と圧倒的な爆発音は、
私の心を押し潰すよう。

炸裂音。

巨大な足を振り下ろす。

炸裂音。

地面に平を叩きつける。

なにかは巨人の形を取り、
確かに私に近づくよう。

炸裂音。

はるか頭上の視線から、逃れるように木の影へ。

炸裂音。

音波は私を逃がさない。

炸裂音。

なにかは私を離さない。

なにかを必死に振り払うように、
反射的に見てしまった。

炸裂音。

始めに、視覚が失われた。

次に、聴覚が奪われた。

最後に、触覚は機能を止めた。

そのあまりの眩しさに、
そのあまりの激しさに、
私の体は動かない。

炸裂音。

閃光、

轟音、

衝撃。

その全てが襲ってくる。

炸裂音。

なにかに掴まれ、心を潰される。

炸裂音。

もう何も考えられない。

炸裂音。

炸裂音。

炸裂音。

炸裂音。

着信音。

炸裂音。

どれくらい時間が経っただろう。

ようやく私は友人からの着信に気がついた。

糸

岡村麻衣

冷たく無機質な地面の上で

もう一つの地面を置いて

誕生の儀式が始まる

さらさらとした常温の雪を熱にさらすと

瞬く間に雪は解け、粘りと熱を持つ

故意に重力に逆らって、蜘蛛の糸は伸びる。

宙に浮かぶと抱いていたぬくもりは飛び立ち

そこに残るのは、自分の軌跡を描いたままの雲の糸。

冷たく硬くなったその化学、芸術の結晶を

私たちは無慈悲にも手折り

完べきな甘い土色の大地に横たえるのだ

そしてそれをみんなは

「器用の賜物」と簡潔にたたえたあと

すべては酸性の中にあっけなく沈んでいく

上空の影

竹之内鞠花

突然、彼は現れた

一日経っても二日経っても動かない

その小さな体には

人間のように手足が生え

大きな目玉が二つ私を見つめている

彼は照明の中に住み込んで

そこから出てくることはなく

影のみでしか存在を確認することはできない

大きな虫なのか

新車の盗聴器なのか

未確認生命体なのか

天から人間を見守る神のように

いつも照明の中から見守る姿から

家の守護神と名付けることにした

見当たらない

クラピグイン・アルチヨム

空を見上げれば、飛行機が一機も見当たらない。

広がる青の絨毯に、雲の跡だけが淡く残る。

海を見渡せば、船は一隻も見当たらない。

ただ波が砂を撫で、引き返す。

静かに流れる壮大なアムール川。

鳥の歌で囁く白樺の森。

夏は三五度で肌が焼け、冬はマイナス三五度で足がかじかむ空気。

直径三キロの小さな町。

新品だったのにもうひびだらけになったアスファルト。

三〇〇円あればフルーツをリュックいっぱい詰められる市場。

いつも扉を開けてくれる古い学校。

筋肉痛になるまで働いた後、苺を満喫できる畑。

レトロラジオが響き渡る古いトヨタイプサム。

家族の笑顔で満ちた家。

それが全部ある場所へ、連れていってくれる飛行機や船が

いくら探しても

一つも見当たらない。

涙するとき

滝川星来

初めては、幼稚園の卒園式
パイプ椅子にスーツ姿の父
感情を表に出さない父が
手元のハンカチは使われていない
メガネが外されている
目元は手で隠され、私の方を一切見ない
歯を食いしばっている
父は泣いていた

二度目は、ノンの最後を見とった時
日が当たる窓際
穏やかに微笑む父
私は一緒に床に座って
愛猫を直視出来なかった
父はメガネを外す
目頭を抑えて
息を殺し
歯を食いしばる
父は泣いた

三度目は、結婚式のcmを見た時
夕食後の団らん
晩酌で気分の良さそうな父
急にティッシュ取ってという

メガネを外しながら
困惑する母と私
笑みを浮かべるも
想像しちゃってと
父は泣く

母と喧嘩した
泣きわめいた
父は微笑んでいた
感動する映画
母と私は号泣した
父は微笑んでいた
試合に負けた
落ち込む私と励ます母
父は微笑んでいた

父の目薬は刺激強め
メガネを外して
さす
うっと声が出そうになり
目頭を抑え
歯を食いしばる
父は泣いていた

いつかまた父の涙を見ると
父と彼は似ている
母も頷く

父は微笑む
彼も微笑む

私はまだ彼の涙をみたことがない

喧嘩して泣いた

彼は微笑んだ

バイトで失敗して泣いた

彼は微笑んだ

寝坊して泣いた

彼は微笑んだ

私の涙に映る彼らは

いつも微笑んでいる

父の涙に映る私はどんな顔をしていただろう

彼の涙に映る私はどんな顔をするだろう

父の涙に映る私が

彼の涙に映る時

私の涙にも彼らが映る

伯父さん

清水葵衣

私には優しい伯父さんがいて、彼はパン屋だった

彼はいつも小麦の匂いがした

ある日私が焼きそばを作っているとき、彼は脳の血管を詰まらせて

そのまま死んだ

死んでしまってもすぐにはさよならじゃないと

そのとき学んだ

伯父さんが死んだ次の晩、彼の幼い息子がうちに来て、

彼が死んだ日に食べなかった私の焼きそばと一緒に食べた

なんでもかんでも入れる我が家の焼きそばには、

彼の息子が苦手なシメジが入っていたけれど、

ゆっくり食べてくれた

静かな夜だった

伯父さんの妻は少し太っていて、朗らかな人だった

彼女は金の亡者だった

伯父さんが死んだら家をさっさと売って、彼の幼い息子を連れて

どこか遠くに行ってしまった

遺産相続がどうにもうまくいかなくて

弁護士を介してしか話さなくなった

壁

壁

一昨日伯父さんの妻を駅で見かけた

知らない人のような彼女

他人になるまではあつという間

嘘になるのもあつという間

彼女はあの世で伯父さんと再会したら何を話すのだろうか

私たちとは弁護士を介して話すのだろうか

私は伯父さんの顔をまっすぐ見れるだろうか

伯父さん、

どうしてその人と結婚したの

母親

小瀧悠希那

ペランダの銀色の皿は、週に何回かだけ灰を溜める

無くてもいいと言いながら、何年も手摺りの角を陣取っているのだ

酒気を帯びて目尻を赤く染めながら、白煙を輪っかにしてみせてくれるのが好きだった

主流煙が大袈裟な溜息になって帰ってくるような日は、触らぬ神にんたとやらと子供部屋に立て籠った

その依存性が身体を蝕むとわかっていても、きつと必要なものなのだろうと思った

咳が酷くなった

気道が喘鳴をあげる音だった

誰も何も言わなかったのに、

翌日、ペランダに灰皿はなかった

右胸のポケットは、もう四角く膨らまない
鼻の奥が熱く痛んだ

クリスマスツリー

杉江咲良

ある雪の日に

クリスマスツリーは蹴り飛ばされた

壁に打ちつけられたツリーは倒れこむことも叶わず、
静かにもたれかかっている

その先に

確かに私は見たのだ

獣がばりばり皮の面を突き破って出てきた憤怒の顔を
狼人間へと今にも変身しそうにいかった姿かたちを
物静かな父と思いやりにあふれる母が
何ものかに変貌する様を

しかし 誰も気づきやしないのだ

窓の外の雪が一切の音を吸収してしまったから
遠吠えはむなしく溶け落ちた

蹴り飛ばされたクリスマスツリーは

たとえ元どおりに置きなおされたとしても
決して元には戻らない

何事もなかったように毎年現れるクリスマスツリーは
明るい光に照らされて
不気味な影をつくつてる

たましい

及川奈桜

火葬場で焼かれていた時は 待つ私たちの近くにいたんだらうか
父が決めた写真がおかれた扉の前で
火葬炉というのはあんがい両隣が近いんだなと気づく

彼女は近くでさまよっていた人と
話したりなんかしてるんだらうか

仏壇で音を鳴らすと、たましいがよばれるらしい
実際はどこにいるかはわからないが

今日もどこかにいるんだらうかと思って
その動きに意味を見つける

アパシー

佐谷戸明穂

なくなりました。亡くなったのは私の心です。

生まれてきた意味などありません、ただここにいるだけなのです。ただ死んでないだけなのです。

昨日は腕を咬みました。今日は髪の毛を抜きました。明日はお風呂に入れな
いでしよう。

生きる意味などありません、ただ呼吸しているだけなのです。

時々まばゆい光に目がやられるときがあります。私はその光の方にはいきません。

昨日は学校に行きませんでした。今日は遅刻しました。明日は寝坊するはず
です。

生きていく希望などありません、死ぬ勇気がないだけなのです。

明日のことは知りません、今日のこととも知りません。

他人を羨むこともあります、でも羨まれることはないのです。

きつとないのです。

絶対にはないのです。

ごめんなさい

でも私はこんな私なのです

安堵の墓石

松下由梨亜

孤独の墓石にひそむ階段を下りて

わたしのなかにひろがる宇宙は

どこまでもきらめいている

口にふくんだ墓石は

石くれの形をして

ときの不可逆性を

抱擁無限の安堵にかえて

あなたに届けてくれるだろうか

わたしには くちびるがある

墓石を食んで

あなたを想い続けているの

きみは燃えさかる石炭のような幼さで

どこまでも熱を移そうとする

わたしに口づけを強要する

二十億光年先で 眼があうと

すべての移ろいゆくものは

永遠なるものの比喩となり

石くれほどの重みをもって

ときのふくらむ不可逆性に

やわらかく押しつける

思いがけないやさしさが
なによりも
嬉しい

笑み

加藤綾華

もし自分の姿が動物に見える鏡があるならば
きっと私は蛇

蛇は冷血動物だから

いつからだろうか

笑みを消すのが難しくなった

いや 消すのはできる

でも 消さない

かといって別に無理して笑っているのではない

いい人そうに見えるのは

笑顔の皮膚があるからかもしれない

きつと触れたらひんやりしている

脱皮したらどうなるだろうか

夢想

鈴木柊

あと一射

あと一本

ほんの少しの意識

ほんの少しの力

たったそれだけで、未来は変わっていた

幻想と化したその一本は

いつも私の脳内を飛ぶ

覚えていますか

あなたが見つめていたことを

あなたを見つめていたことを

決着が今か今かと待たれる中で

未来を悟った私を、じっと見ていた「あなた」

ただ目と目が触れ合うだけの、二人のセカイ

何を考えていたのですか

私を笑っていたのですか

大抵は白く着飾っているけれど

あの日のあなたは、何にも邪魔されず

ただただ清々しい、「あお」だった

それを私は、とても綺麗に感じました

思わず笑みがこぼれるくらい

ふふふ

負けちゃった

今も時々、あの矢が連れて来る
あの日の未熟さと
今も変わらず見つめるあなた
果てを知らない夢想の矢

ペンだこ

折原彩世

それは漢字ドリルを解いていた私の薬指に

それは受験勉強に追われた私の中指に

鉛筆を正しく持てず怒られたときも

テスト期間で殴り書きしたときも

私と机に向かっていた この不格好な腫れは

今も 度々 誇らしく

はれてみせる

記念日

村橋小梅

いつもより、肩に力が入って

慌てて瞼をとじて

手はどこに置こうかと迷子になって

呼吸は無意識のうちに止まっている

何も聞こえない

初めて、誰かのまつ毛が肌に触れる

初めて、食べ物以外のものが唇に触れる

レモンでもイチゴでもない

微かなミンティアの匂い

誰になら話せるだろう、

十七歳の、夏。

東口にて

小谷柚乃

最寄駅の東口を最後に出たのはいつだったか

知らないバス停

知らないコンビニ

知らない横断歩道

雰囲気も身なりも全然違うのに

良く知った駅を名乗る看板は不思議だ

久しぶりに会った君は

四年前の服を着ていた

さんざん迷ったくせに

結局いつものジェノベーゼを頼む

へたくそなミサンガや突然切れたの線の話は終わって

恋バナを聞く

脈がないことを力説する君の長い睫毛

好きな人は私に似ていると言うから

試しにキスしてみようかと言いかけてやめた

君の反対口は見えない

君と私が幸福になるためのミサンガは

いつか切れて

ちいさなリングに変わる

言えなかったけどね、

君が選ぶ人なら大丈夫だよ

私に似てるのはちょっと不安だけど

やっと食べ終わってフォークを置く

リップを塗りなおした君と目が合う

駅にて、（私は走馬灯の欠片とすれ違ったような気がした！）

呉東校

忙しなく案内を続ける改札の前で、

蛍光灯は私をレコードの針に仕立て上げた

人の流れがスロウに見える今、

（この瞬間にも世界は回転している！）

電光掲示板はいつにも増して饒舌に

不安げな視線を一身に受けとめていた

家に着くまでの時間を検算することに忙しくって、

忙しくって。

線路の先に転がった痛みから気を逸らしている

ワルツのリズムが砂を噛むように

いくつもの革靴が床に張り付いたガムを黒く、

ながくながく引き延ばして

悪い報せに飛びつく一過性の関心をよそに

自分にとっての明日がまた来るといふ漠然とした問題への回答に躓いたところ
ろで、

重たい瞼が再び開かれることに一喜一憂する

そして夜はまた顔を覗かせて、私のおセンチを嘲笑うのだ

幕間

想定外の休符が配置された夜に

洗面所の鏡の前で

(レジンの汚れに気がついた！)

カーテンコールはまだ訪れない

リング

増山優

ふとリングに目をやる。
誇らしげなメダル色をしている。
なのにリングの周りをみてごらん。
指はハゲた銅の一部に侵食され、
緑に変色した
プールサイドのゴム床の色みたいな、そんな色
ガツンガツンと鉋物を削り出す音
ズドンと集積袋を荷台に下ろす音
欲なんてみじんもなく
まるで縫製工場のフィルムに出てくる
女工かのような規則正しい手さばきで
じいさんはこぶだらけの分厚い掌で
堅く鑿を握り締め、
一心不乱に彫金する
熱中症だの筋肉痛などはこれぼちも憂慮しない。
それをつけて誰が誰と愛を交えただの夢想だにしない。
ただ淡々と彫金する
いずれ誰かのもとに届くと知りながら。
幸せ、それでいて軽々しい繕いの一端を担う
だがそれはいずれ錆びる
そこには何か不足している
そこには目には見えない 何か がある
忘れてはならない「リンク」がある。

もが

福田椿

空気に触れ酸化する口の中の味は、
ぺろぺろ味でもある。

もがもがのもが。

モカって名前だったらちよつとかわいかった。
だってどうせ子犬の名前でしょ。

あなたに似合う子犬、なんて気に食わない。

ちよつと思ってたけど

犬はわんわんわんではなく、

もつと苦しそうに鳴く。

「待て」はしたくはないし 従順さを大人から教わりたくない。
宿題なんてあとでやるから放っておいて！

東北地方の小都市で待ってるから。

家出少女の成れの果てが、のら犬だったなんて知らなかったでしょ。

あなたが物分かりの良さそうな顔をしている間に、

私は、真っ当なあなたの世界をめっちゃめちゃにしている。

あなた方を守るための、あらゆる法整備を

その整った鼻を明かしてやる。

ぺちゃんこの鼻の犬の将来は悲惨さ。

今からでも、はっきり夢を！

コピーされた犬たちに祝福を。

そう、
どんな優しげな腕の中でも、犬はらんらん
目を光らせているんだ。

あなたが全てを失った時にだけ、犬は狩猟時代を思い出し
良きパートナーとなるでしょう。
あなたに心からの充足を与えるでしょう。

そうしてはじめて子犬は懐く。

社会人だからって偉ぶるなよ。
わたし、訴えます。

現代社会的な「家族」としての扱いは
モラハラだって！

綺麗な言葉で伴侶動物を愛さないください。

産業動物のように、もっとかけがえないものに思ってください。
どうしたって、やっぱり

犬は家畜が羨ましいです。

犬は
人間を

恨めしく思っているのです。

あなたにとって存在しない自己の身代わりとして
犬が選ばれた。

それを幾重にもしてコピーしてあげるから

結婚しないで。(況や、私となんて！)

良識ある君なんて嫌いだよ。

スパゲッティ手づかみで食べる。

ああ私、やっぱりアメリカへ

太平洋を犬かき、犬かき、渡米します。

もがもがのものが

どうでもいい映画が作られたまちへ

あなたが都合よく死んでしまうまちへ

死んでも新聞には載りませんよ

あなただってどうせ犬だしね。

結局のところ、

あなたの名前の方が、ずっと

犬らしかった。

でも、

そういうのが好きで今ここにいるんだよ？

やっぱり遠くへは行けやしないまま……

毎日違う寝床で寝たい。

もがもがのものが